

A I ネットワーク社会推進会議  
影響評価分科会  
第2回 議事概要

1. 日時

平成29年1月23日（月）16:00～18:00

2. 場所

中央合同庁舎第2号館 8階 総務省 第1特別会議室

3. 出席者

(1) 構成員

城山分科会長、大屋分科会長代理、三友副議長（A I ネットワーク社会推進会議）、  
西田幹事（A I ネットワーク社会推進会議）、板垣構成員、板倉構成員、稲葉構成員、井上構成員、  
江間構成員、大田構成員、落合構成員、香月構成員、河井構成員、クロサカ構成員、榊原構成員、  
実積構成員、杉原構成員、田中構成員、萩田構成員、林（雅）構成員、原構成員、村上構成員、  
横田構成員、渡辺構成員

(2) 総務省

谷脇情報通信国際戦略局長、武田大臣官房総括審議官、吉田情報通信国際戦略局参事官、  
元岡情報通信政策研究所長、福田情報通信政策研究所調査研究部長、  
成原情報通信政策研究所調査研究部主任研究官、市川情報通信政策研究所調査研究部主任研究官、  
尾川情報通信政策研究所調査研究部主任研究官

(3) オブザーバー

内閣府、文部科学省、情報通信研究機構、科学技術振興機構、理化学研究所、  
（一社）産業競争力懇談会

4. 議事概要

(1) 運営方針等

資料1の運営方針（案）の確認が行われ、三井住友銀行の板垣理事及びGoogle合同会社の杉原  
執行役員（公共政策担当）が構成員に就任する旨の報告があった。

(2) 「A I 開発ガイドライン」（仮称）の策定に向けて整理した論点に関する意見募集について

事務局より、資料2に基づき、「A I 開発ガイドライン」（仮称）の策定に向けて整理した論点に  
関する意見募集について報告がなされた。

### (3) 海外の動向について

一般財団法人マルチメディア振興センター 田中 主席研究員より、資料3に基づき、以下の発表があった。

#### ○ 「米国におけるAIの経済・社会への影響にかかる検討

－ I E E Eと大統領府の二つの報告書にみるリスク対応の方向性－

(概要) I E E Eの報告書は、自律AI、AS (Autonomous System) の技術者のための参照文書にしたいという目的のもと、主として多様な分野の参加者により構成される8つの委員会における議論の概要がまとめられている。また、大統領府 (ホワイトハウス) の報告書は、昨年 (2016年) 10月の2つの報告書のフォローアップの位置づけで、多くの便益のためのAI開発への投資、将来に向けた国民の教育、移行過程における労働者支援の3つの戦略を掲げている。

### (4) 先行的評価について

事務局より、資料4に基づき、先行的評価について説明が行われた。

### (5) 分野別評価に関する分野の区分について

クロサカ構成員及び株式会社日本総合研究所 東 主席研究員/融合戦略グループ長より、資料5及び資料6に基づき、以下の発表があった。

#### ○ 「分野別評価の考え方ー試論ー」 (クロサカ構成員)

(概要) AIネットワーク化の本格的な進展には相応の時間を要すると想定すると、少子高齢化などの中長期的な社会動態変化を前提として、よりバックキャスト的なアプローチで分野別評価を行うことが重要である。既存の産業構造の枠組みから考えると、将来の社会の在り方を見誤る可能性があることを踏まえて、検討を進めるべきである。

#### ○ 「複雑化する社会におけるAIネットワーク化のエコシステム -AIネットワーク化による影響及びリスクの分析及び評価手法について-」 (東 主席研究員)

(概要) 既存の産業軸を前提とするのではなく、モビリティサービスといったサービスを軸にして産業構造が変わりつつあることを踏まえて、時間軸や世代軸を入れたエコシステム全体を捉えた上で、サービスの利用者の視点を取り入れて整理する手法が考えられる。時代とともにエコシステムも変わるため、随時見直しを行いブラッシュアップすることも重要である。

### (6) 意見交換

#### 【横田構成員】

- ・ ユースケース分析において、利用者側のミスユースについては、リスクとして位置づけるのではなく、利活用ガイドラインの検討に活かすためにも、リスクコミュニケーションとして扱うことが考えられる。

#### 【落合構成員】

- ・ 評価軸の検討に当たり、国連のSDGs（持続可能な開発目標）等で持続可能な開発目標が定められていることやOECDの世界的な動向予測などを参考にすると立体的な議論になる。

#### 【実積構成員】

- ・ リスクについては、単に列挙するのではなく、どのリスクがどの程度増減したのかという観点が必要である。人間が行う場合でもリスクはあるわけで、AIシステムを利用することによってリスクが増加するのか、減少するのかが分かるようにすべきである。
- ・ 全ての分野が同じスピードでAIネットワーク化が進むわけではなく、進展が早い分野と遅い分野が併存すること自体がリスクになり得る。また、例えば、自動化された工場の中に人間が入っていくのは非常に危険であり、人間とのインタラクションに留意する必要がある。

#### 【クロサカ構成員】

- ・ 実積構成員の御指摘のとおり分野ごとに時間軸が異なるものと考えられる。また、中長期的には、様々な産業分野が複雑に絡み合っており、現在と全く異なる産業構造になっている可能性もある。短期的にクリアに見えていることが何か、長期的な視点で検討すべきことが何かを峻別し、蓋然性が高いと想定される要件が何かを見定めることが重要である。

#### 【萩田構成員】

- ・ ユースケースを並べるだけでなく、自分の職業がどうなるのか、災害が発生した際に何をすればよいのかなど、まさに利用者目線で、一般の方が容易に理解できるものとなるよう工夫してほしい。

#### 【板倉構成員】

- ・ 欧州では、リスクに対して立法化して対応することが多く、立法化されると貿易障壁になることもあり得る。AIの分野でも、ロボットにキルスイッチを義務づける議論が進んでいる。日本としても、許容できる範囲、越えてはならないことの線引き（閾値）を考えておく必要がある。

#### 【板垣構成員】

- ・ AIネットワークサービスの提供主体として、政府や自治体などの公的部門のほか、実際には民間企業が果たす役割も大きい。収益性や採算性など経済的な観点についても、重要なポイントになるため、念頭に置きながら検討を進めてほしい。

#### 【西田幹事（AIネットワーク社会推進会議）】

- ・ AIネットワーク化の進展により新しい社会を作っていくということであるが、多くの人々が実際に従事している現在動いている既存のシステム（レガシーシステム）をどのようにするのか。雇用など代表的であるが、生活者にとって現実に迫っている重要な問題であり、きちんとビジョンを示すことが必要である。

#### 【クロサカ構成員】

- ・ 人間がやらなくてもよい仕事というものが有り得るのではないかと考えた時に、仕事のやり方を変える、サービスの提供の方法を変えるということも含めて検討することも必要ではないか。また、それはフォアキャストというよりは、バックキャスト的なアプローチが馴染むかもしれない。

#### 【杉原構成員】

- ・ アウトプットをもう少し分かり易く正確にして議論するべきではないか。また、我が国として、災害が多いことや少子高齢化というのは、AIシステムを利活用して、それを評価するに当たり、考慮しなければならない課題であることを踏まえて、議論してほしい。

#### 【江間構成員】

- ・ シナリオとは何を指すのか。事務局から説明があった1つ1つの利活用の事例のことなのか、もう少しストーリーテリング的なものなのか、最終的なアウトプットがどのようなものになるのか整理してほしい。

#### 【大屋分科会長代理】

- ・ 個々の製品・サービスが市場に供給されるということは、一般的には、リスクは（許容できるレベルまで）減少しているはずである。ただし、個別事業者の観点からはリスクは減少しているが、社会全体としてはリスクが増加する、あるいは、社会の中で最終的にリスクに対する責任を負う主体がない状態となることが問題であり、そこに着目すべきである。

#### 【渡辺構成員】

- ・ リスクの量の多寡のほか、リスクの種類にも注目すべきである。リスクの種類によって、人間にとっての受け入れ可能性・受容性が異なることがあり得る。また、リスクが大きいため開発や利活用を止めるということではなく、きちんと救済措置を設けることが重要である。